



第7日

全国高校野球選手権大会 第7日は12日、甲子園球場で2回戦4試合が行われ、本県代表の八戸学院光星は延長十回、愛工大名電（愛知）に5-6でサヨナラ負けした。愛工大名電のほか、近江（滋賀）・明豊（大分）・海星（長崎）が3回戦に進んだ。八学光星は2-1でリードした七回に3点を追加するなど、優位に試合を進めたかに見えたが、直後に4点を奪われて同点に追いつかれると、延長十回、愛工大名電の美濃の適時打で万事休した。愛工大名電が夏の甲子園での勝を挙げたのは1981年にエース工藤公康を擁して4強入りして以来、41年ぶり。今春の選抜大会準優勝の近江は鶴岡東（山形）を8-3で下した。山田は2本塁打を含む1安打を許したが、12三振を奪って3失点完投。明豊は一関学院（岩手）に7-5で競り勝った。九回に牧野の適時打などで2点本勝ち越した。海星は天理（奈良）に4-2で勝利。序盤の得点を向井、富原の粘投で守り切った。

# 光星 サヨナラ負け

## 延長 継投策実らず

## 粘投富井に甲子園の重圧

【評】八学光星は1-1の五回、先頭の佐藤が左翼フェンス直撃の打球を放つと、守備の隙を突き、そのまま本塁に滑り込んで勝ち越した。七回には深野の2点適時三塁打や中澤の中前適時打で5-1とリードを拡大。相手の主戦有馬を計10安打で得点で打ち崩したが、八回以降は2安打にとどまった。先発洗平は5回1失点と好投したが、七回に2番手の手田が無死一、二塁のピンチを招くと、後を継いだ渡部が4安打を浴びて同点に追いつかれた。九回のピンチも富井やワゴンポイントで登板した洗平歩の力投で乗り切ったものの、延長十回、再登板した富井が先頭打者に左越え三塁打を浴び、中前監督などで無死一、二塁とされるも、美濃に中前に運ばれ、万事休した。

### 「全て相手応援に感じた」

八学光星は延長十回、七回から九回途中まで力投した富井が再びマウンドに上がり、愛工大名電の強力打線に立ち向かったが、サヨナラ負けを喫し、力尽きた。七回の死満塁の1点も与えられないピンチで緊急登板した富井。捕手文元から「強気で投げてこい」と声をかけられ、後続を遊直に打ち取った。八回以降は均衡状態が続くも、九回一死まで無失点で抑えた。得点圏のピンチは、主戦洗平歩がワンポイントでしのいだ。

#### 焦点

延長十回、仲井監督に「もう一回先頭から」と声をかけられた富井。これまで、何度もピンチをしのぐ強心臓ぶりを発揮してきたが、「球場全体が360度、相手の応援に感じた」。先頭打者に三塁打を浴びて無死三塁。後続は2ボールから甲信敬選。その後一塁走者に盗塁を決められ、無死二、三塁と最大のピンチを迎えた。伝令が伝えた仲井監督の指示は「まずアウト一つ。1死なら高塁策で併殺が迫る。打席には左の好打者7番

#### 負けは私の力不足

八戸学院光星・仲井監督 「非常にいい試合を選手たちがやってくれた。結果、負けてしまい、私の力不足。悔いている」

#### 選手の心が一つに

愛工大名電・倉野監督 「選手たちの心が一つになって、チームワークが試合を動かした」

（川崎真也）

# 洗平比堂々 5回1失点

1年生で唯一メンバー入りした八学光星の左腕洗平比が、甲子園の大舞台で先発。初回は失策も絡んで先制を許したものの、140<sup>+</sup>前後の直球と低めに集めた変化球で愛工大名電打線を翻弄（ほんろう）。5回を被安打4、1失点に抑え、4奪三振と好投した。相手の打者陣は左投手がやや苦手とのデータ分析に基づき、1回戦翌日のミーティングで仲井監督から先発起用を告げられた。びっくりしたが、言われたからにはチームを勝たせるヒッチングをするだけと思っていた。先制された後は、みんなが点を取ってくれろと信じて気持ちを切り替えた。味方の堅守にも助けられながら、外角への直球とスライブを振り返った。

（野村通）

## 健闘たたえ 大きな拍手

光星学校応援

八戸市の八戸学院光星高校では12日、運動部の生徒や教職員ら約60人がオープンスペースの大型スクリーンで試合を観戦した。チームは愛工大名電にサヨナラ負けを喫したが、大きな拍手で健闘をたたえた。



7回にチームが追加点を挙げ、喜びを爆発させる八学光星の生徒たち。12日午後、同校

面では大歓声が上がった。九回には一打サヨナラのピンチを迎えたが、主戦洗平比が相手の4番を抑えろと喜びを爆発させた。

（相澤賢者）

た生徒たち。しかし、続く延長十回にチームはサヨナラ負け。生徒たちは肩を落としてしまった。最後は拍手でナインをねぎらった。

女子バスケトボール部3年の小笠原幸香（ゆかさ）さんは「ピンチの場面、みんなで守る意識が見えた。自分たちはこれから公式戦があるので見習いたい」。男子ソフトテニス部1年の菊池琉斗さんは、先発登板し5回1失点と好投した同学年の洗平比に刺激を受けた様子で「同じ年齢なのに、大舞台で成績を残してすごい」と話した。

# 12安打「打の光星」片りん見せる

## 佐藤 ランニングHR

1-1で迎えた五回、先頭で打席に立った八学光星の佐藤は1ボールからの2球目、自分の胸元に来た狙い球の直球を強振した。高く舞い上がった打球は左翼フェンスを直撃。「確実に入るわけではない」と全力疾走していた佐藤は、相手の守備が打球処理に手間取る隙を突いて頭から本塁に飛び込んだ。ランニング本塁打に沸くベンチ。佐藤はベンチに戻ると、笑顔で仲間とハイタッチを交わした。

県大会は20打数2安打、打率1割と低迷。特に内角の球を思い通りに捉えきれなかった。県大会優勝後、コーチ陣から指摘を受け、左足を大きく開く打撃フォームに修正し、バットに力を伝える感覚を磨いた。県大会は納得できる結果を残せなかった。甲子園に何とか間に合わせようと必死に練習してきたと振り返る。

（川越真也）

## 深野 巧打で2点

2-1と1点リードの七回、1死一、三塁の好機で打席に入ったのは、前の打席で三塁打を放った八学光星の深野。初球の外角低めの直球を体を崩しながらも振り切ると、打球は一塁の頭上を越え右翼線に落ち、2人をかえす適時三塁打となった。「相手投手の膝元に落ちる変化球に手を出さないことを意識した。次になぐことだけを考えた」と振り返った。

## 井坂 意地の同点打

1点を追う三回、八学光星は2死から先発の洗平比が自ら左翼線に二塁打を放って出塁。続く1番井坂が内角高めの直球を左前に運んで、同点に追いついた。井坂は「先制されて苦しい場面で（洗平）比呂が自分でチャンスをつくってくれた。先輩として意地でもかえしてやると振り抜いた」と語る。

この日は初戦の7番から1番に打順を上げた井坂。「練習ではどの球にも対応できるくらい調子は上がっていた」と言葉通り、左右に打ち分けて3安打の活躍を見せた。「データ班の投手分析のおかげ。甲子園に連れてきてくれた170人の仲間（部員）に感謝している」（川越真也）